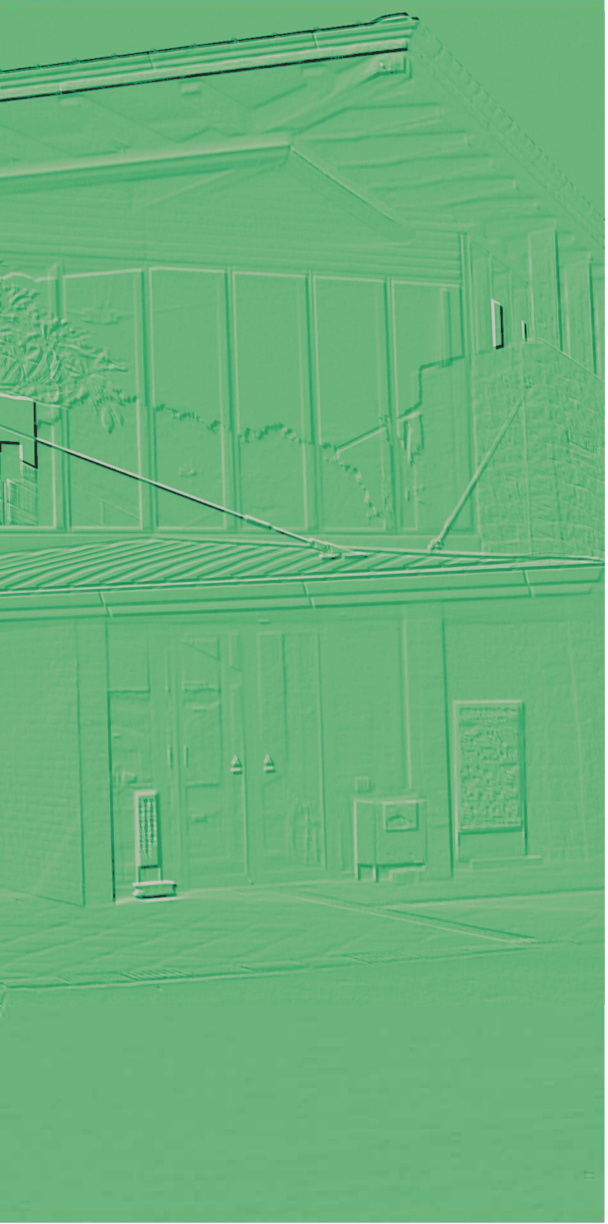
研究紀要・年報

縄文の森から

From JOMON NO MORI

第8号



《研究ノート》

古墳時代肝属平野における地下式横穴墓出土鉄器についての一考察
新屋敷　久美子

南部九州における中世瓦質土器の蛍光X線分析
黒木　梨絵

植物質資料からみた南九州
－天神段遺跡を中心に－
深川　祐子

全点ドット調査の有効性と問題点
－1970年代から1990年代の調査を中心に－
立神　倫史

宮ノ上遺跡の縄文時代後期前半の土器群について
長野　眞一

大隅地域における古墳に関わる祭祀遺跡
中村　耕治

郷土教育と考古学
－相川日出雄の埋蔵文化財を活用した教育実践から学ぶこと－
吉元　輝幸

《資料紹介》

南部九州における古代のカマドに関する覚え書き
上床　真

平成26年度　年報

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2015.10

『縄文の森から』 第８号　目　次

≪研究ノート≫

古墳時代肝属平野における地下式横穴墓出土鉄器についての考察

新屋敷　久美子　・・・・・ 1

南部九州における中世瓦質土器の蛍光 X 線分析

黒木　梨絵　・・・・・ 7

植物質資料からみた南部九州
― 天神段遺跡を中心に ―

深川　祐子　・・・・・19

全点ドット調査の有効性と問題点
― 1970 年代から 1990 年代の調査を中心に ―

立神　倫史　・・・・・33

宮ノ上遺跡の縄文時代後期前半の土器群について

長野　眞一　・・・・・47

大隅地域における古墳に関わる祭祀遺跡

中村　耕治　・・・・・53

郷土教育と考古学
―相田日出雄の埋蔵文化財を活用した教育実践から学ぶこと―

吉元　輝幸　・・・・・65

≪資料紹介≫

南部九州における古代のカマドに関する覚え書き

上床　　真　・・・・・77

平成２６年度年報　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・85

全点ドット調査の有効性と問題点①

－1970 年代から 1990 年代の調査を中心に－

立神　倫史

Validity and Problems of All Dot Excavation

Tategami Michifumi

要旨

本稿では、全点ドット調査の有効性と問題点について検討する。鹿児島県で行政発掘が本格化した 1970 年代前半より出土遺物の３次元的出土位置の記録化を行ってきた。いわゆる全点ドット調査（註１）といわれる手法で多くの成果を挙げてきた。今回，調査開始期から 1990 年代までに行われた特徴的な全点ドット調査による調査事例を概観した。特に縄紋(註２)文化研究に大きく寄与することになった事例を中心に言及し，改めて全点ドット調査が出土状況の客観的情報提示という観点から，今後も調査手法の１つとして有効であることを再確認した。

キーワード　全点ドット調査　ドットマップ　型式　層位　接合

１　はじめに

本稿では、鹿児島県の行政目的で行う埋蔵文化財の調査（以下　行政発掘と略す）における全点ドット調査の有効性と問題点について検討する。本県で行政発掘が本格化した 1970 年代前半より個々の出土遺物の３次元的出土位置の記録にあたってきた（註３）。いわゆる全点ドット調査である。

近年，文化庁監修で作成された「発掘調査のてびき」（以下 てびきと略す）によると全点ドット調査（註４）自体が目的化し，ややもすればルーチンワーク化してしまい，なぜ点を取るのかという本来的な意義が見失われている場合もあるという。それは，時間と経費の浪費につながり，成果も期待できないため，慎むべきであると指摘する（文化庁文化財記念物課　2012）。てびきが指摘するのは，調査手法にいくつかの選択肢がありながらも無条件に特定の調査手法を採用することに対して，警鐘を鳴らしている点である。

本県での行政発掘において，特に縄紋文化研究で得られた考古学的成果は，当該地域に広域テフラがいくつも堆積していたことや出土した遺物の出土位置の客観的記録が行われていたことが背景としてある。

特に，「もう一つの縄文文化」（新東　1994 ほか）といわれた南九州地域（註５）の縄紋時代草創期における隆帯紋土器期の遺構・遺物の出土のあり方（新東　2006 ほか）や上野原遺跡Ⅳ工区（第２地点）における縄紋時代早期前葉の集落形態（中村耕ほか　2002）などに関する調査成果は，薩摩火山灰やアカホヤ火山灰などの広域テフラの降灰後という年代的担保に裏打ちされていた。また，てびきにも引用されている上野原遺跡第 10 地点検出の「環状遺棄遺構」（八木澤 2003）もその性格に関しては，様々な見解はあるものの（水ノ江　2012　佐々木 2014 ほか），仮に効率性を重視した小グリッド単位での取り上げだった場合には，どうなっていたのだろうか。この遺構はドットによる出土情報の提示により，その視覚的な効果も相まって，東日本の縄紋時代中期の環状集落における遺物出土状況との類似性を指摘する見解まで出てきた（水ノ江　2012）（註６）。水ノ江和同氏の解釈に関しては，今後十分検討する必要があるが，関東地方の調査事例と比較できた背景として同様の全点ドット調査が行われていたことが大きい。ただ，これだけ長期にわたり同様の調査法を行いながらも，全国的な縄紋時代の編年研究や集落研究に全点ドット調査を活用した形で積極的にコミット出来なった理由に関して多く語られることはなかった。

また，調査期間と経費が限られている行政発掘においては必ずしも全点ドット調査が有効でない場合がある。そこで今回は，本県における全点ドット調査の有効性と問題点について，調査開始期の 1970 年代から 1990 年代まで行われた全点ドット調査での特徴的な報告事例を中心に概括していきたい。本論となる南九州地域の縄紋時代前半期（註７）の「型式」と「層位」を中心とした土器研究や集落研究に関する部分については次号以降でまとめたい。

２　鹿児島県における全点ドット調査報告の変遷

鹿児島県で行政発掘が本格化するのは，日本各地で盛

行した開発の波が地方へ波及し始めた 1970 年代前半頃である。鹿児島県では，九州縦貫自動車道建設に伴い調査組織が整備され，本格的な行政発掘が開始された。旧姶良町所在の小瀬戸遺跡を皮切りに旧吉松町から鹿児島市にかけて計 38 遺跡が調査された。同時に，県や市町村の諸事業に伴う行政発掘もこの頃に本格的に開始され，主に教育庁文化課（のちの文化財課）の職員が調査を担当した。1970 年代前半といえば，麻生優氏の「原位置」論（麻生 1969）（麻生 1975）が調査方法における理論的な潮流として旧石器文化研究や縄紋集落研究において，全点ドット調査の進展とともに盛行していた頃と推察される（小林 2003）。そうした影響が本県の全点ドット調査導入にどの程度及ぼしたかに関しては，改めてまとめてみたい。ここでは事例を概括するのみにしたい。

なお，全点ドット調査は本来遺構や石器以外の出土遺物に乏しい旧石器文化解明のために活用されてきた側面もあり，旧石器時代に関する全点ドット調査における成果は，ここで触れず，縄紋時代以降の調査事例を出土土器に関する事項を中心に取り扱うことにする。

① ドットマップの初現

花ノ木遺跡（諏訪ほか 1975）

「遺構・遺物出土実測図」

花ノ木遺跡は鹿児島県埋蔵文化財報告書（1）として 1975 年に刊行された。発掘調査は先の九州縦貫自動車道関連の遺跡調査とほぼ並行して，1974 年に調査された。図 1 にあるのは第Ⅵ地点アカホヤ火山灰層にあたる第Ⅱ層下の第Ⅲ層塞ノ神式土器を主体とする縄文時代前期（註８）の包含層を中心とした遺構・遺物実測図である。ローマ数字で割り振られた土坑・集石遺構を中心に，主な土器片を×，石鏃を△で表している。石鏃にも番号が付けられており，別図の遺物実測図に対応するようになっている。残念ながら図版掲載の各土器と各出土位置を対応することは不可能ではあるが，ドットマップより土器も出土位置を記録していたことが分かる。いずれにせよ行政発掘が本格化した当初より出土遺物の３次元的出土位置の記録していたことを，花ノ木遺跡の調査報告書から窺い知ることが出来る。

花ノ木遺跡報告以降の全点ドット調査に基づく 1970 年代後半から 1980 年代前半の特徴的な報告事例は，新東晃一氏が当時の調査事例を詳細に分析する中で，包含層の構造に言及した「南九州の縄文時代包含層の構造」（新東 1984）で取り上げられた報告事例を参考にした。

② 接合線の登場

下剥峯遺跡（新東ほか 1978）

「114 土器平面図」

下剥峯遺跡は，県営ほ場整備事業に伴って 1977 年に調査された西之表市所在の遺跡である。この遺跡は，新東晃一氏による一連の南九州の縄紋時代早期・前期の土器編年の見直しのきっかけとなった遺跡である。また，近年押型紋系土器との併行関係が議論されている下剥峯式土器の標識遺跡でもある。

下剥峯遺跡では，アカホヤ火山灰を鍵層として九州縦貫自動車関連の桑ノ丸遺跡や加栗山遺跡などの本土の同時期遺跡の包含層と対比が可能となったばかりでなく，轟（註９）・曽畑式土器がアカホヤ火山灰より上層

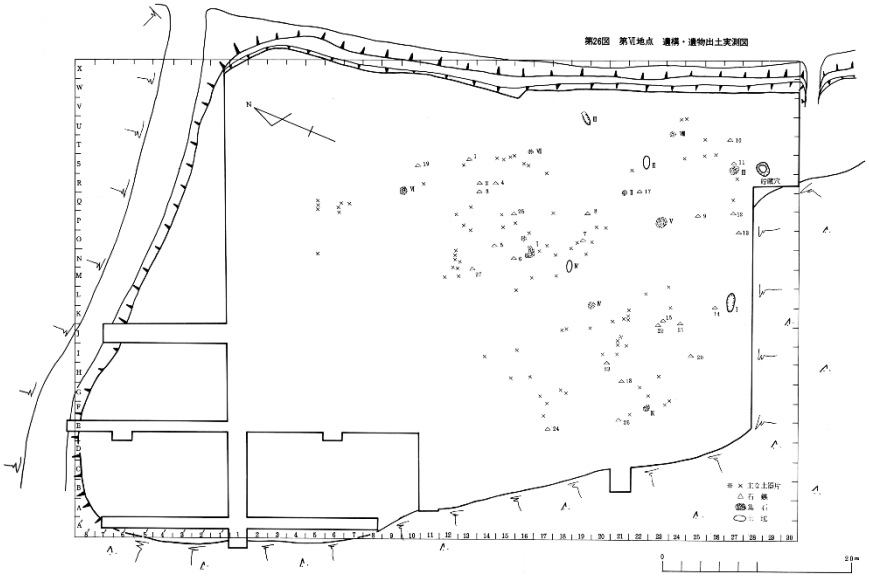
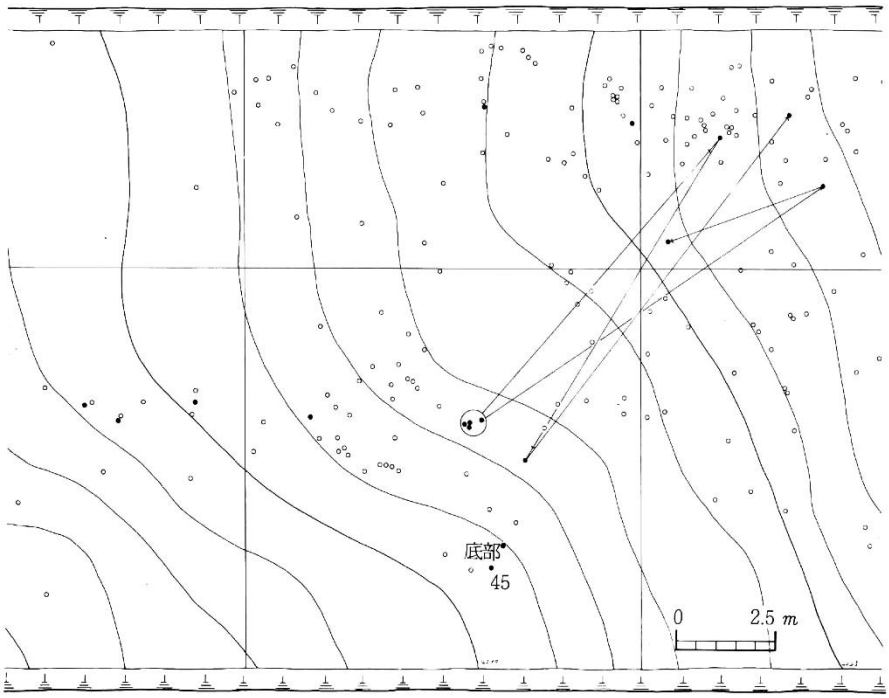


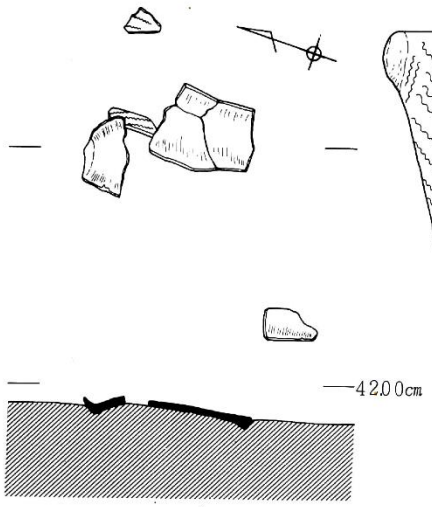
図１　花ノ木遺跡「遺構・遺物出土実測図」（報告書より一部抜粋）

で出土し，下層より貝殻文土器(下剥峯式土器)，吉田式土器が出土した。下剥峯遺跡の調査を通じて，南九州地域の各遺跡間の基本土層の対比を可能にしたアカホヤ火山灰の重要性が認識された。調査を担当した新東氏は以後，土器編年の見直しだけでなく，アカホヤ火山灰が南九州地域の縄紋文化にどのような影響を与えたのかを追求する研究へとシフトすることになる。

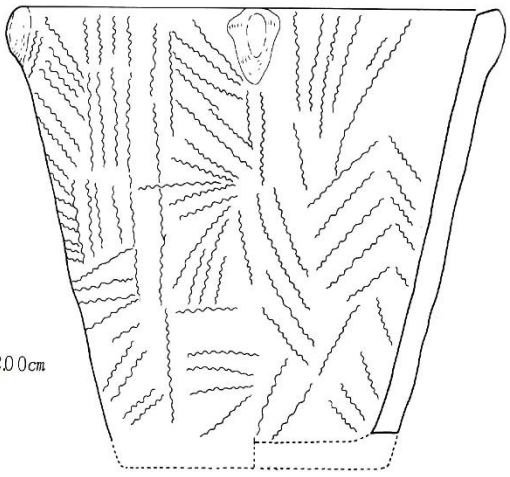
こうした包含層の垂直的な層位による成果とは別に，下剥峯遺跡では出土遺物の平面分布に関しても，意欲的な報告が行われた。図２は，「114 土器平面図」である。114 土器は，現在でいうところの下剥峯式土器であり，ほぼ完形に復元できるほどの出土量である。ここで注目したいのは，ドットマップに接合線が登場したことである。114 土器は 6－Ｂ区にまとまって出土する円形部分を中心に，最大で 11mにわたり広域に接合していることがこの図から分かる。報告者の新東氏は，「遺物が破棄されてからⅢ層(赤ボッコ)が堆積されるまでの時期に，相当な遺物あるいは層の流動があったことを示している」と出土状況とその後の堆積状況に関する解釈を行っている。接合線を含むドットマップを提示することで，より客観性の高い調査所見として示すことが可能となった。



第 22図　114 土器出土平面図　(→印に接合)



第 23図　114 土器出土状態



第 24図　114 土器復原図

図２　下剥峰遺跡「114 土器平面図」(報告書より抜粋)

③　型式ごとのドット図の提示と個々の実測遺物との対応関係をドット図に記載

中尾田遺跡（新東ほか 1981）

「第９g・９h 類土器分布図」

ドット調査の報告方法がさらに詳細化した事例が中尾田遺跡報告である。中尾田遺跡は，九州縦貫自動車道建設に伴い 1978 年～1979 年に調査された旧横川町所在の遺跡である。縄紋時代早期・中期の遺構・遺物や中世山城跡と考えられる遺構が発掘された。

中尾田遺跡で注目されるのは，全点ドット調査による包含層出土遺物の報告方法がほぼ確立されてた点である。現在も見られる分類単位ごとのドットマップ，掲載されている実測遺物との対応関係を示すドットマップ内のナンバーや接合線，さらにドットマップとは直接関係ないが掲載された遺物すべての観察表が提示された。これらは包含層発掘において，全点ドット調査を行った

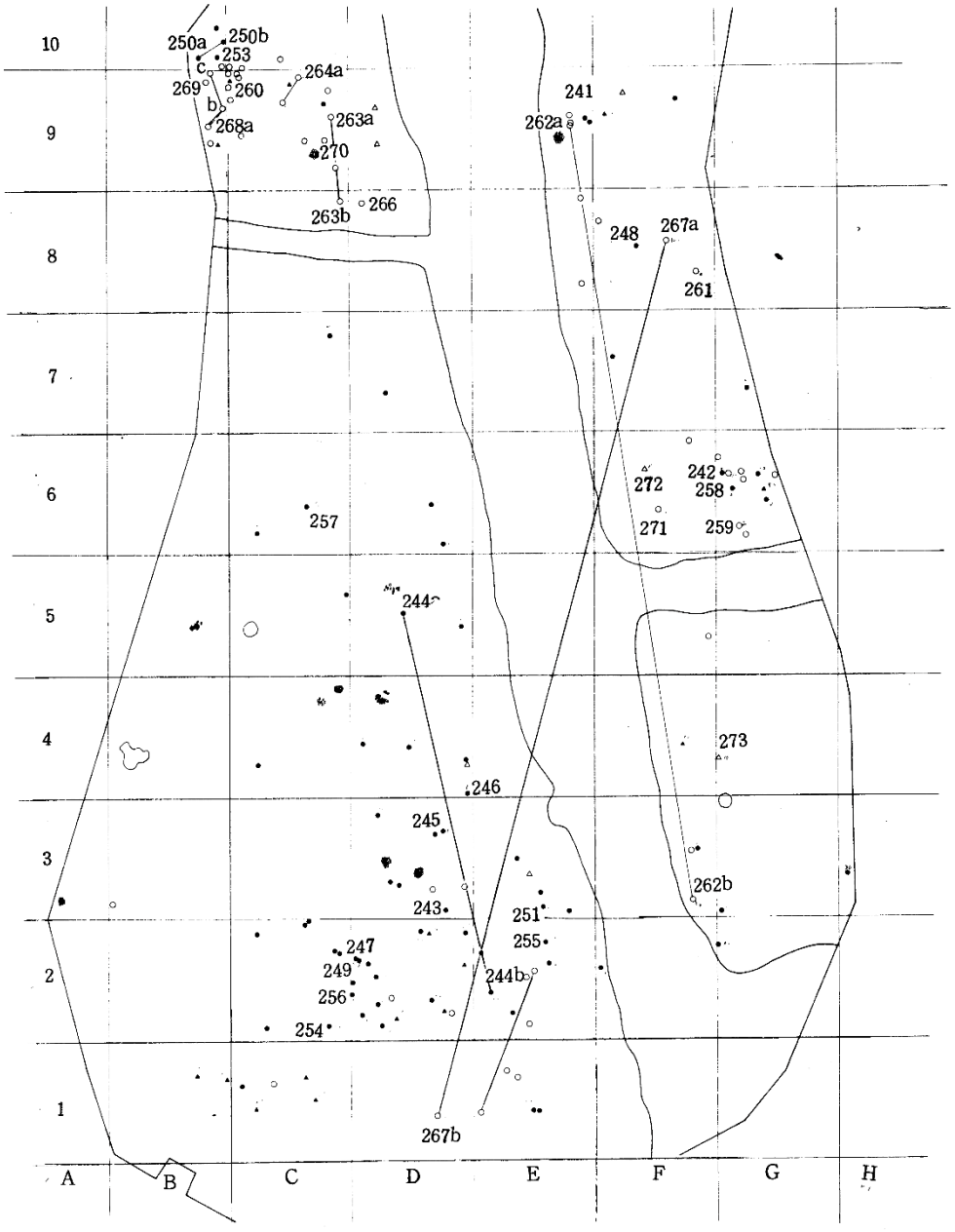


図３　中尾田遺跡　「第９g・９h 類土器分布図」（報告書より抜粋）

際に，得られた必要な情報がほぼ盛り込まれているといっていい。てびきが指摘する「ドットマップの作成自体が目的化し，本来の明確な目的や問題意識をもたないまま，作業工程として機械的に行う例」（文化庁文化財記念物課 2012）とは，こうした中尾田遺跡報告で提示されたような必要な情報が出揃っていない報告書が該当するのではないだろうか。少なくとも今日においても中尾田遺跡は，手向山式土器を含めた押型紋系土器の出土状況を第三者が検証する際に極めて有効なデータを提示するばかりでなく，新東氏が指摘するように 75mの接合距離は，傾斜地における包含層の構造を具体的に考察する手かがりを与えてくれる。

また中尾田遺跡では，他にもいわゆる中尾田Ⅲ類をはじめとした縄紋時代中期末葉～後期初頭を考える上で重要な土器が数多く出土している。春日式土器終末から並木・阿高系土器への接続を型式学的側面だけでなく，出土状況を含めた層位学的側面から考察する上でもローデータとして十分検証に値し，耐えうる資料ではないだろうか。

④　ドットマップ以外の出土状況を示す手法

石峰遺跡（河口ほか 1981）

「拡散度」「移行度」「集中度」による土器移動表

中尾田遺跡の報告と前後するが，1981 年に刊行された旧溝辺町所在の石峰遺跡の報告では，ドットマップ以外の出土状況を示す手法が提示された。石峰遺跡も中尾田遺跡同様，九州縦貫自動車道建設に伴い 1975 年～1978 年まで調査された。旧石器時代から縄紋時代早期・前期を中心とした遺跡である。旧石器時代（報告では先土器時代）に関しては，出土状況図にはドットマップが用いられているが，縄紋土器に関しては，平面分布に関して，土器移動表とよばれる独自の手法が提示された。表１がそれである。この表によれば各土器型式ごとの出土状況のマクロな傾向をつかむことができる。マクロな傾向とは，ドットマップが個々の遺物の２次元的出土位置を示しいているのに対して，土器移動表では，10mのグッド単位の大まかな移動傾向が基準となっている。河口貞徳氏の作成したこの表の「拡散度」とは，土器の個体または型式が 10m４方の区画を１として広がった範囲を数字で示したものである。また，「移行度」とは土器の個体または型式が，上下に移した度合を地層の数で示したものであり，「集中度」とは，土器の個体または型式が，破片として移行した結果，最も多く土器片が残留する層の土器片の数を％で示したものである。当時，縄紋時代早期では古手に位置づけられていた石坂式土器から晩期の土器まで型式ごとにまとめられ，その平面的な広がり，垂直分布のピークをコンパクトにまとめ上げている点が特徴である。開地遺跡での出土状況が貝塚遺跡や洞穴遺跡に比べ安定しないといわれながらも石峰遺跡では，垂直分布に関しては，河口氏の編年観にほぼ沿うような形で出土していることが看守できる。

挿図番号		71	72	72	71	69	74	74	75
遺物番号		5	7	8	6	2	11	12	13
完・否		完	完	完	完	完	完	完	完
型式名		石坂	楕円形押型	菱形押型	円筒形条痕	手向山	平栫（小）	平栫（中）	平栫（大）
拡散度		5	1	7	2	4	1	2	5
移行度		4	1	5	4	5	4	3	5
集中度	1 層	Ⅳb中	Ⅳa～Ⅳb	Ⅳa上	Ⅳa下	Ⅳa下	Ⅳa下	Ⅳa下	Ⅳa下
	1 %	47	100	38.5	50	48.7	49	57	50
	2 層	Ⅳb		Ⅳa上		Ⅳa下	Ⅳa下	Ⅳa下	Ⅳa下
	2 %	32		45		54	69.2	60.9	45
出土状況		D E 7 2 8 19 7 9 9 1	E 8 29	B C D E 4 1 5 9 1 1 6 1 6 44	F G 6 5 7	D E F 4 6 15 61 5 6 1	B 9 52	C 6 82 7 18	B C D E 5 21 1 6 6 80 3

表１　　石峰遺跡「土器移動表」（報告書より抜粋）

⑤　竪穴住居内の出土状況の提示

王子遺跡(立神ほか　1985)

「４号住居跡実測図及び出土遺物平面・垂直分布状況」

谷添遺跡(下大川ほか 2000)

「遺物接合図」「１号竪穴住居内の遺物出土状況」縄紋時代ではないものの竪穴住居出土遺物がどのように報告されていたのか見てみたい。余談ではあるが小林謙一氏によると，関東地方では 1978 年頃，竪穴住居の十字ベルトによるセクション観察と，覆土上下層の線引きは常識化していた一方で，遺物の取り上げは住居以外はグリッド単位や住居を四分割した覆土中一括取り上げが普通であったという(小林　2012)。本県の行政発掘開始当初から遺構内にセクションベルトが設定されていたことは報告書の写真図版などからも確認できる。遺構内の取り上げもおそらく包含層同様に平板測量とレベル機材による測定を併用し，３次元的出土位置が記録されていたと推察される。

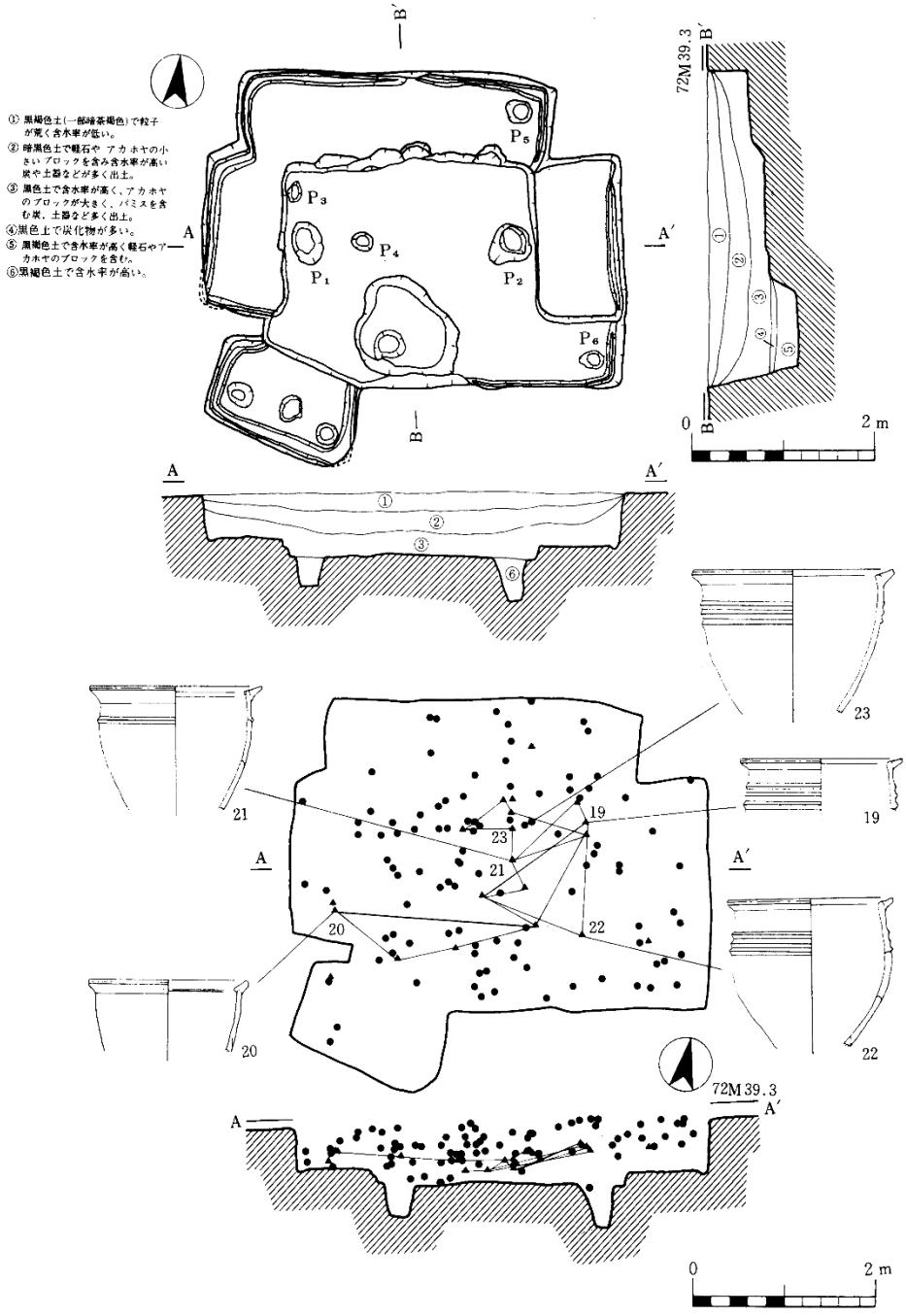


図 4　　王子遺跡　「4 号住居跡実測図及び出土遺物平面・垂直分布状況」（報告書より抜粋）

当時鹿児島県の先史時代の集落遺跡での調査において，竪穴住居内の埋土の堆積状況と出土遺物の出土位置が示されている好例は王子遺跡の報告であろう。王子遺跡は，国道 220 号バイパス建設に伴い調査された弥生時代中期の集落遺跡である。南九州では比較的規模が大きく多様な集落跡があったことから保存運動にまで発展した遺跡である。王子遺跡の報告では，竪穴住居跡ごとに遺構内の埋没過程を示すセクション図と遺構内出土遺物の平面・垂直分布と接合関係が示されている。図４は，４号住居跡の遺物出土状況である。垂直分布の投影範囲が不明であることや接合線と図化されている接合したと思われる完形土器との関係が今ひとつ判然としないが，遺構内の③層とされた床面直上の堆積層中に出土遺物が少ないことが分かる。つまり出土遺物は，４号住居の埋没が始まり床面近くが微凹地上になっている状態のところに廃棄されている可能性があると考えられる

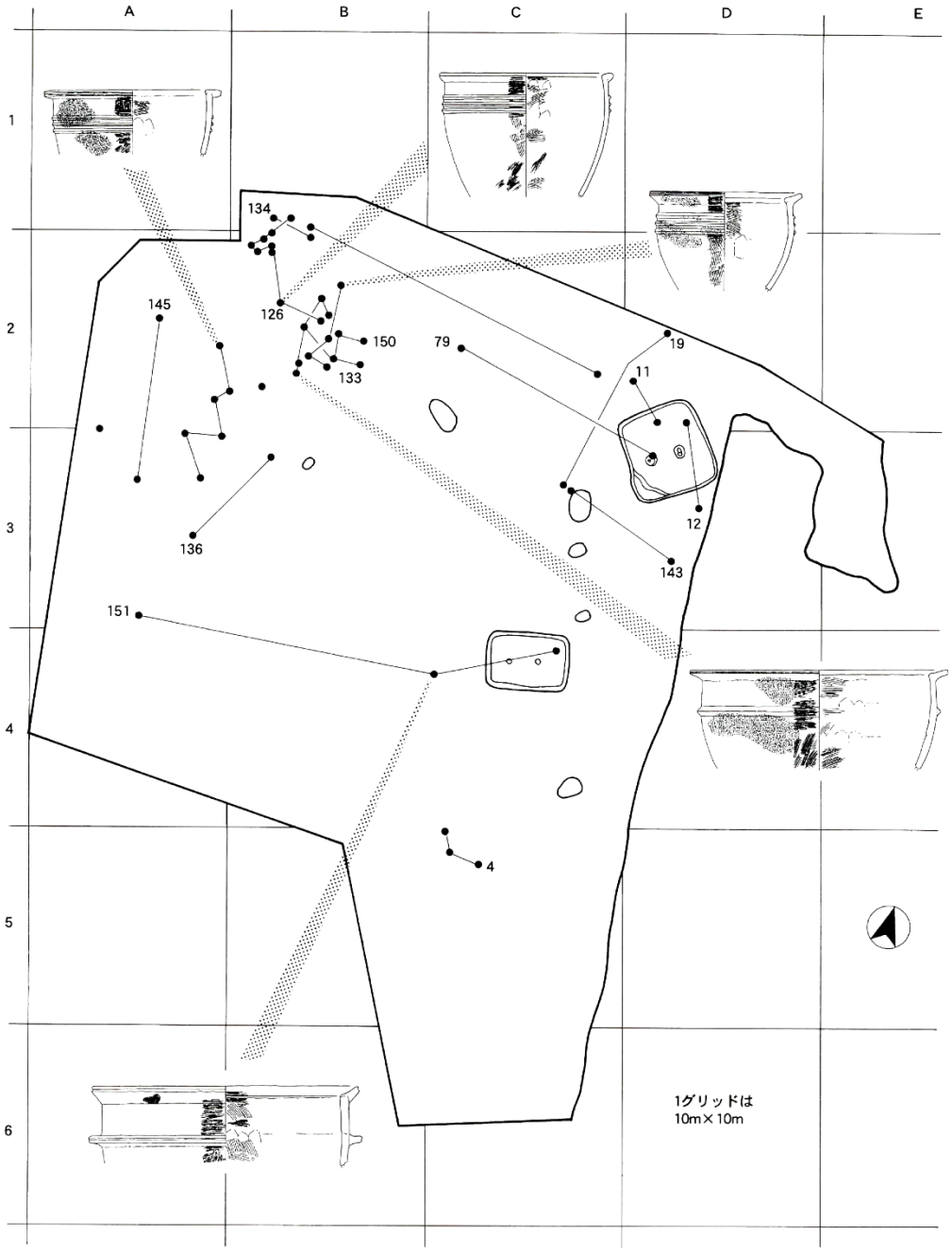


図 5　　谷添遺跡　「遺物接合図」（報告書より抜粋）

出土状況である。残念ながら報告書には，遺構内の堆積状況，遺物出土状況に関する記述は乏しいが写真図版を見る限り遺物が床面から高い位置で出土していることが分かる。出土土器の多くが４号住居の廃絶時の直接的な年代を示す可能性は低いと言える。王子遺跡は山ノ口式土器の一時期に収まる比較的短期間で廃絶されたとされる集落遺跡である。ただ一時期の集落景観はどの程度あったのか，竪穴住居の切り合いもなく，遺構間の出土遺物の接合関係等が分からないため，厳密には不明と言わざるを得ない。

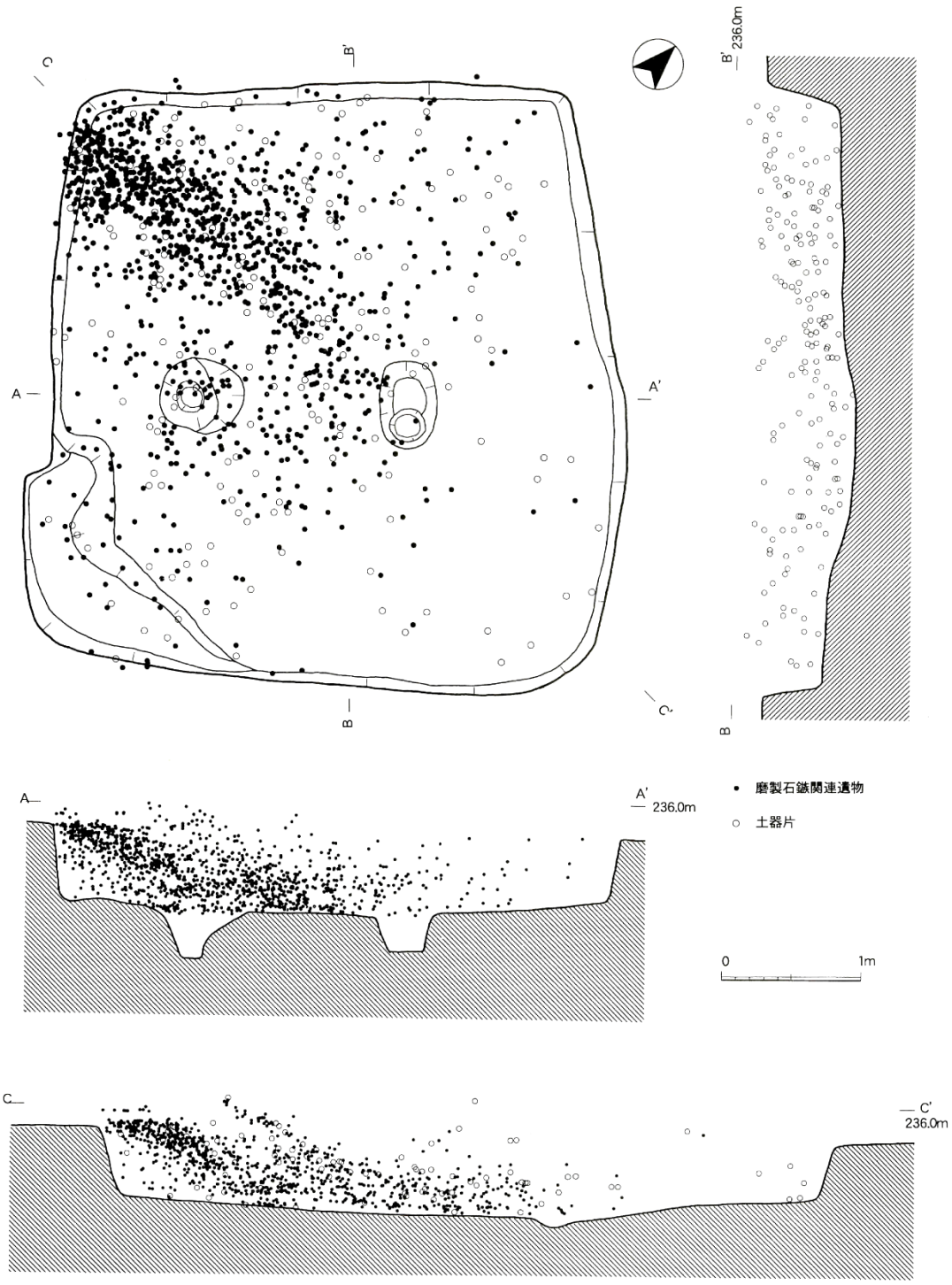


図６　　谷添遺跡　「1 号竪穴住居内の遺物出土状況」（報告書より抜粋）

調査としては，やや後になるが 1998 年に発掘し，2000 年に報告書が刊行された旧根占町所在の谷添遺跡(下大川ほか 2000)では，２基の弥生時代中期の竪穴住居と遺構外出土遺物との接合関係が示されており(図５)，報告にあるように高地性集落かどうかはともかくとして，台地縁辺部西側の平坦地と竪穴住居が有機的な関係にあることを想起させるような出土状況である。なお，谷添遺跡１号住居(図６)は，磨製石鏃を製作した際の剥片・砕片類と考えられる遺物が北西方向から中央部にかけて流れ込むように遺物が入り込んだとされている。垂直分布にあるように流入状況には大きく２パターンあり，間層に暗紫ゴラに該当する部分が含まれており，竪穴住居跡の凹地を利用して，開聞岳の暗紫ゴラが降下する前後２時期にわたり磨製石鏃が行われたと考えられている。遺構内の遺物は前述の関東地方で見られたような遺構一括取り上げが行われている事例が現在でも少なくない。そうした中にあって遺構内外の個々の出土遺物の出土位置の記録化に努め，当該遺跡の遺構廃絶を含む土地利用の痕跡(黒尾　1995)を出土状況の分析を通じて時系列的に雄弁に語ってくれた好例といえよう。

その後，縄紋時代の集落遺跡においても，草創期の三角山Ⅰ遺跡や早期前葉の上野原遺跡(第Ⅳ工区)，定塚遺跡などで竪穴住居と遺構内外の遺物出土状況に関する事例が見られるようになった。これらの縄紋時代の集落遺跡に関しては別稿で述べたい。

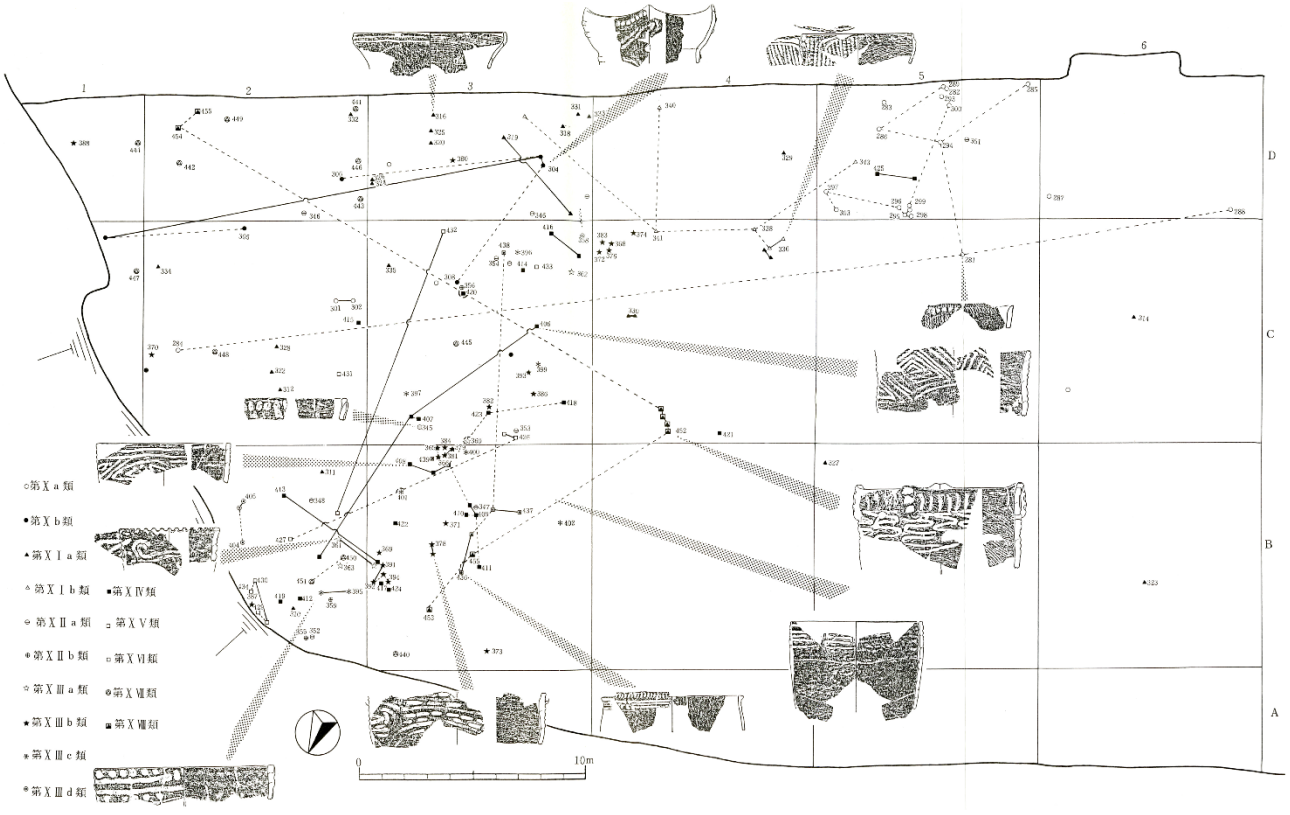


図７　　榎木原遺跡　「縄文第Ⅹ類～第ⅩⅧ類土器の出土状況」（報告書より抜粋）

⑥　包含層内での出土状況に関する分析

榎木原遺跡(弥栄ほか 1987)

「縄文第Ｘ類～第ＸⅧ類土器の出土状況」

南九州地域において，縄紋土器の編年を措定する際に，時期的なまとまりを担保してくれるような良好な竪穴住居や土坑出土資料，貝塚遺跡や洞穴遺跡に見られるような一括資料の出土が乏しいのが現実である。この 40 数年来多くの開地遺跡を発掘しながらも，縄紋時代の遺跡おいて，竪穴住居が検出される例は決して多くない。本県の竪穴住居の検出数は，西日本の他地域に比べ比較的多いものの，確認出来る多くは早期前葉と後期以降に限られている。この竪穴住居を主体としない集落形態こそが，むしろ西日本の縄紋時代の多くの時期の特徴かもしれないことが近年の研究で明らかになりつつある。

そこで，遺構出土遺物を含めた良好な一括資料に恵まれない場合，西日本では土器編年研究を行う際に，型式学的にまとまりのある遺跡や出土地点ごとの引き算(千葉　2008)によって措定することがある。

地点ごとに出土遺物が平面的にまとまる包含層での出土状況に関し，分析が行われたのが鹿屋市所在の榎木原遺跡である。榎木原遺跡は国道 269 号線高須バイパス建設に伴い，1985 年に調査が行われ，1987 年に報告書が刊行された。縄紋時代早期から中・近世にかけて多くの遺構・遺物が出土した。榎木原遺跡では，分類された縄紋時代から弥生時代の遺物出土状況がドットマップに接合した個体の実測図とともに掲載されている。平面分布により土器型式間に偏りが見られることが顕著な例が図７に示した「縄文第Ｘ類～第ＸⅧ類土器の出土状況」である。九州の縄紋時代中期の代表的土器であった並木・阿高系土器の編年研究が揺らぎ始めた時期で，旧松山町所在の前谷遺跡(中村 1986)での出土例をはじめ，それまで縄紋時代前期に位置づけられていた春日式土器と瀬戸内地方に分布の中心があると考えられていた中期の船元系土器との共時性が注目されるようになった。そうした状況で，それまで定説化されていた並木・阿高系土器と船元系土器の共時性を疑うような事例が，榎木原遺跡での平面分布である。第Ｘ類が船元式土器，第ＸⅠ類が春日式土器，第ＸⅡ・Ⅲ類土器は阿高系土器と分類されている。分布の中心の在り方に大きく２つのパターンがあると分析している。１つは，船元式土器と春日式土器がＣ・Ｄ－２～５区に収まるまとまり，もう一つは阿高式土器がＢ・Ｃ－２・３区にまとまっている。このような平面分布の相違は，時間的相違を含めて何らかの相互関係を検討する資料にはなり得ると報告者の前迫亮一氏は締めくくっている。

榎木原遺跡報告は，並木・阿高系土器と船元系土器が時間的に併行しないことを示したばかりでなく，各時期の遺物出土状況に関して詳細に言及している点が特筆するところである。

⑦垂直的な層位が良好な遺跡での全点ドット事例

一湊松山遺跡(堂込ほか 1996)

「５層出土土器出土状況」

かつて原位置論が一世を風靡していた 1960 年代後半から 70 年代初めにかけて，集落遺跡の調査において原位置の記録よりも層位の把握が重要であるとの認識で住居遺物の出土遺物の層位別取り上げを徹底した調査と整理を行い，すぐれた成果を挙げたのが千葉県貝の花貝塚の発掘調査であったという(小林　2003)。

また，1994 年日本考古学協会総会において小林謙一氏や黒尾和久氏らの全点ドット調査による成果発表に対し，里浜貝塚での調査経験を持つ岡村道雄氏が「点を取

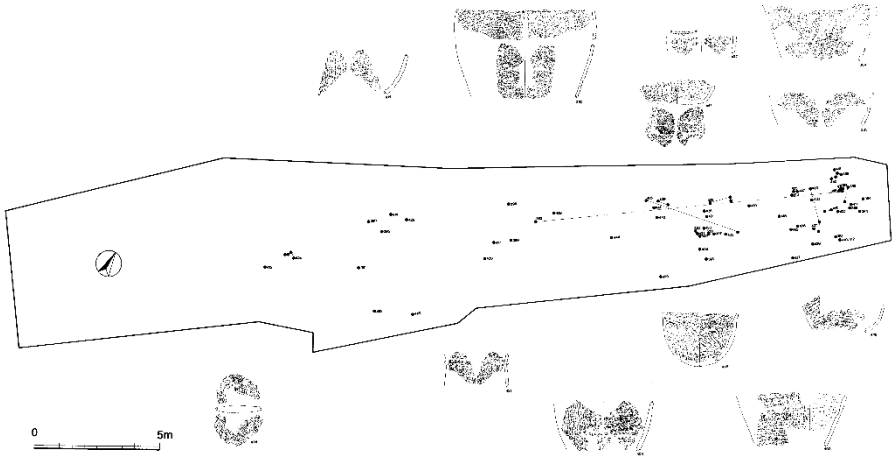


図 8　　一湊松山遺跡　「5 層出土土器出土状況」（報告書より抜粋）

らなくてもきちんと分層発掘をすれば同じ結果が導き出せるのではないか・・・。」といった趣旨の発言があったという(纐纈　2007)。開地遺跡と竪穴住居内や貝塚遺跡での層位を混同するつもりはないが，何層もの間層にパックされたような垂直的な層位が良好な遺跡や遺構等においては，全点ドット調査の実施を軽視する観が一部ある。

垂直的な層位が良好な遺跡で分層された結果，同一の層より複数の系統の土器が出土し，その時間的関係をどのように考えるかを示してくれた南九州地域での事例の１つが 1993 年～1995 年に調査が行われ，1996 年に報告書が刊行された旧上屋久町所在の一湊松山遺跡である。一湊松山遺跡は縄紋時代前期～後期にかけての砂丘遺跡で，途中無遺物層を挟みながら 18 層で構成されている。縄紋時代前期の曽畑式土器の変遷過程が層位的に確認出来た点や深浦式土器内の細別時期に関する層位的裏付けが取れたことなどが成果として挙げられる。

層位ごとに出土状況と遺物の報告が行われている。各層位ごとの平面分布より集石遺構や石斧のデポなどの遺構と出土土器との重なりが当時の生活空間を想起させる。

その一方で，これだけ層位的に良好な遺跡においても曽畑系土器と条痕紋系土器群との層位的な分離を行うことができなかった。図８は第５層出土土器出土状況である。深浦式土器，条痕紋土器、曽畑系土器が同一層位の比較的近いエリアで出土している。一般に，開地遺跡おいて異系統土器もしくは型式学的に異なる土器群間の共伴(もしくは伴出？)を同一包含層内での平面分布が近接するという理由だけで傍証することは，方法論上も運用上も危うい。条痕紋系土器群は，その型式内容が無紋土器と同様に乏しいため曽畑式土器や深浦式土器との折衷土器も確認し得ないため，型式学的観点から同時性を説明することは難しい。報告者の堂込秀人氏は曽畑系土器と条痕紋土器が併行する段階と条痕紋土器が単独で後続する時期が１時期存在すると分析する。この段階は，近年堂込氏がまとめた曽畑式土器終末と轟Ｄ式土器成立から尾田式土器への変遷の過程(堂込　2013)に該当する時期でもある。

いずれにせよ，垂直的な層位が良好な遺跡においても全点ドット調査を行うことにより，分層したまとまりを，さらに平面分布を有機的に加味することにより，時間的関係をより客観的に考察できるのではないだろうか。南九州地域の縄紋時代前期後葉から中期初頭の型式と層位を考える上でも，平面分布も含めた当該時期の土器群の併行関係に関しては，次号で述べたい。

３　まとめードット調査の有効性と問題点①ー

以上，行政発掘が本格化した 1970 年代から 1990 年代の全点ドット調査に関する本県の特徴的な調査事例を駆け足で概観してきた。調査者，報告者の意図するところと異なる点が多々あるかもしれない。また，抽出した事例も網羅的に確認した上でないこともご寛恕いただきたい。そして，2000 年代以降デジタル機器やソフトが導入されてから大量のデータ処理が可能となってからの調査事例に関しては，触れられなかった。

今回取り上げた全点ドット調査は，出土状況をどのように客観的に提示するかを模索した方法の１つに過ぎない。そして繰り返し述べるように特定の調査法を無条件に導入する必要はない。当然のことであるが，発掘調査においては，その目的・性格，期間や経費など様々な観点から調査法が決定される。

そうした前提に立った上で本県では，これまで数多く全点ドット調査を実施してきた。今回概観した調査成果は，全点ドット調査の有効性を示す一部に過ぎない。逆説的になるが，良好な遺構や層位に恵まれなかったからこそ，全点ドット調査により，その地域の土地利用の痕跡を探ることができた例もある。

一方で，全点ドット調査には多くの問題点があることも事実である。一番大きい問題点は，出土遺物の出土層位の認定である。大村裕氏は，佐原眞氏が行政発掘を視察する中での感想を紹介している(大村　2011)。佐原氏が発言した部分を引用(佐原　2005)すると，「現在日本各地で，たくさんのところで発掘が行われています。考古学研究者みずからではなく，おじさん・おばさんが掘っています。発掘品はしばしば土の柱の上に乗っかかった状態においてあります。大規模の発掘で，どこまで土の柱に乗っかっていてどの層のものか正しく認識して取り上げることができるのかなぁと疑いの目で見てしまうことがあります。」

これは，遺物取り上げを行う際の各遺物に出土区や層位，日付などを記したラベル付けを行う前の発掘作業風景に近い。

前迫亮一氏は，Ｐ11 といわれる桜島起源のテフラが堆積した遺跡において，開地遺跡での層位認定の難しさを「完全な一次層として大地をパックするようなテフラならともかく，パミスの濃淡等でその存在を把握できるような状況の場合，土層断面では境界線が引けても，実際の面調査の際にはまだら模様的にしか把握できない場合がある。このような場合に遺物の出土層位をどう把握し記録するかについては，かなり慎重な判断が必要となる」と指摘している(前迫 2009)。

２者は，開地遺跡での層位認定と調査者との関係を異なる視点から述べたものである。層位の認定の難しい事例は多々ある。面調査を広域に行っている際，近くに土層観察用のセクションベルトがない場合，層位の変わり目付近の出土遺物の出土層位認定が困難な場合があることを多くの調査員が経験している。一度認定された出土遺物の層位は，遺物が取り上がった後ではよほどのことがない限り変更されることはない。出土遺物のドットの副情報として層位は記録されていく。数量的に安定し，出土層位に一定の傾向が定まっているような遺物であればさほど問題ないかもしれないが，編年の時間的位置が微妙な遺物であったり，出土量の少ない遺物だった場合は，出土層位の認定がわずかに異なって場合でも，時として重大な解釈誤認を起こすことにも繋がりかねない。ただ，これはドット調査というよりも大規模な開地遺跡の調査の問題点かもしれない。

次に平面分布に関する問題点である。等高線がドットマップに示されていない場合に，特に注意すべき点であるが，地形の傾斜によっては，遺物が低い場所でまとまる可能性がある。こうした地点で，仮に型式学的に異なる遺物がまとまって出土してもただちに共伴とすることはできない。旧地形の状況を十分加味した上で出土状況を考えければならない。これは垂直分布を投影する場合でも同じことである。どのよう地形なのか，垂直分布を投影するエリアが広いと純粋な垂直堆積以外に地形の制約を受けた堆積状況が投影される場合がある。

最後に，ドットマップの提示に関する問題点を挙げておきたい。多くの労力と経費をかけて取り上げた遺物もどのように情報を出力するかでその活用範囲が異なってくる。出土遺物のドットマップが出力されているだけでは，全点ドット調査を行う必要性は半減する。ドットマップの利点は出土状況を追証できることにある。そのためには，分類された遺物ごとのドットマップの提示に終わらず，せめて掲載遺物との対応関係や観察表に出土位置の３次元座標，出土層位が記載してあれば，検証する側はそれらのローデータを駆使して各々のテーマに即した分析が可能となってくる。そして，全点ドット調査が大きくその効力を発揮するのが，接合関係に基づく遺物や遺構間の時間的関係の復元である。接合作業も多くの時間と労力を要するが，接合線１つ増えることで遺跡の形成過程の見方が深まってくる場合もある。

一般に分類ごとの差は，ドットの種類や色を変えて出力することにより違いが分かる一方で，ポイントの大きさを統一した場合，遺物の大きさや重量に関しては等質化されてしまい，ドットマップの読図を見誤る可能性もある。比較的大型破片同士が広域に接合するパターンと大型破片を中心に周囲に小破片が接合するパターンでは，表現されるドットと接合線に違いが見いだせない場合がある。この問題は，大きさや重量を階級ごとに区分し，それをドットに反映すれば解決できるもののそういう配慮がなされていない場合の読図は注意すべきであろう。

以上，全点ドット調査の問題点をいくつか挙げてみた。

４　おわりに

全点ドット調査を行い，報告書に成果を掲載するまでには多くのハードルが存在することも事実であるが，今一度その意義と有効性と問題点を振り返り，今後の調査に活かしていきたい。今回はかなり偏った取り上げ方で不備な点も多い。特に前半の類例列挙は新東氏の論考(新東　1984)によるところが大きい。改めて氏の発掘調査に対する意識の高さと先見性を認識することになった。また，今回小稿の執筆に際して，行政発掘開始期に関して，上田耕氏，新東晃一氏，立神次郎氏，堂込秀人氏、長野眞一氏，中村耕治氏，前迫亮一氏に，全点ドット調査について有馬孝一氏，今村結記氏，尾川満氏，纐纈茂氏，小林謙一氏，建石徹氏，辻明啓氏，福永修一氏，馬籠亮道氏にご教示いただい。記して感謝したい。

【註】

１　点取り調査のどこまでを全点ドット調査というのか不勉強のため判然としないが，小林謙一氏が近年山梨県大日野原遺跡で出土位置を記録した遺物は，表土以外の包含層・遺構内の土器，石器は全点，自然礫は500 円玉以上の大きさの資料であるという(小林ほか2013)。本県の行政調査においては，自然礫の取り上げに関しては，ケースバイケースであるが，概ね全点ドット調査と呼ばれる調査の範疇に含まれるのではないだろうか。

２　大村裕氏による論考(大村　2012)により，山内清男氏の『縄紋』が本来的な学術的な概念定義の上にある語であることを知った。この趣旨に乗っ取り，特に引用等でない場合，地紋や文様要素には「紋」を，一定の文様要素により表出された模様には「文」を用いたい。

３　調査初期の頃は，平板測量による出土遺物の出土位置の記録以外にも，通常の遺構実測のように遣り方測量により出土位置の記録を行い。その際は，遺物の裏表の向きや形体等も記録していたという。

４　てびきではドットマップの作成とあるので，全点ドット調査そのものを指している訳ではないので，ニュ

アンスが少し異なる可能性もある。

5　本稿で指す南九州地域とは，鹿児島県本土，都城以南の宮崎県南部，人吉地方以南の熊本県南部の地域である。しかし，こうした先験的な地域区分を所与のものとした考古学の分析はあくまでも前堤的な仮説作業と解すべきである（小杉 1995）。

6　水ノ江氏の解釈は佐々木藤雄氏が指摘するように時代性や地域性を無視した恣意的・主観的な分析の観はどうしても否めないという点に同調する。出土遺物の出土状況に類似性が見られようとも竪穴住居も検出されない中で関東地方の縄紋時代中期に見られる「巨大環状集落」と対比する点や中央の空白域を墓域と断ずるなど根拠が不明確である。

7　ここでは，縄紋時代草創期～中期までをさす

8　当時はまだ，アカホヤ火山灰層を鍵層に縄紋時代早期～前期の土器編年が再編成される前で，塞ノ神式土器は前期に比定されていた。

9　現在は，これらの土器は轟 B 式土器ではなく，野久尾式土器といわれる一群に比定される。相美伊久雄氏は，縄紋時代中期初頭に位置づけている（相美 2010）。

【参考文献】

麻生　優　1969　「「原位置」論序説」『上代文化』第 38 号

麻生　優　1975　「「原位置」論の現代的意義」『物質文化』24

大村　裕　2011　「山内清男の層位論的研究法」『縄紋土器の型式と層位』

大村　裕　2012　「縄紋と縄文」『日本先史考古学史の基礎研究　新装版』

黒尾　和久 1995　「縄文中期集落遺跡の基礎的研究（1）」『論集　宇津木台　第１集』

纐纈　　茂 2007「縄文時代集落研究の新地平（東海版）」『セトルメント研究』６号

小杉　康　1995　「土器型式と土器様式」『駿台史学』第 94 号

小林　謙一 2003　「縄紋竪穴住居調査史の一断面」『下総考古学』17

小林　謙一 2012　「縄紋時代住居調査学史」『縄文研究の新地平（続々）』

小林謙一・矢嶋良太・小澤政彦　2013「三次元全点ドット情報システムによる縄紋集落の分析に向けて」『日本考古学協会第 79 回総会研究発表要旨』

相美伊久雄　2010　「九州南部における中期前葉土器の現状と課題」『九州の縄文時代中期土器を考える　発表要旨・資料集』

佐々木藤雄　2014　「改めて縄文集落研究の新地平とは何か」『異貌』第 31 号

佐原　　眞　2005　『考古学への案内』

新東　晃一　1984　「南九州の縄文時代包含層の構造」『調査研究報告』補説

新東　晃一　1994　「南九州の縄文草創期・早期の特色」『考古学ジャーナル№378』

新東　晃一　2006　「旧石器から縄文へのダイナミズム」『南九州に栄えた縄文文化・上野原遺跡』

千葉　　豊　2008　「型式学的方法①」『歴史のものさし』縄文時代の考古学２

堂込　秀人　2013　「曽畑式土器の展開～轟 D 式土器の祖型式の設定～」『鹿児島考古』第 43 号

文化庁文化財記念物課　2012　「表土の掘削と包含層の発掘」『発掘調査のてびき－集落遺跡発掘編－』

前迫　亮一　2009「火山噴火と遺跡群②」『大地と森の中で－縄文時代の古生態系』縄文時代の考古学３

水ノ江和同　2012「九州の縄文集落を構成するさまざまな遺構」『九州縄文文化の研究』

八木澤一郎　2003「上野原遺跡第 10 地点検出の「環状遺棄遺構」について」『研究紀要　縄文の森から』創刊号

【引用報告書】

河口貞徳ほか　1980　　「石峰遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財調査報告書』(12)

下大川司ほか　2000　　「谷添遺跡・出口遺跡」『根占町埋蔵文化財発掘調査報告書』(10)

新東　晃一ほか　1978　「赤木遺跡　下剥峯遺跡　大四郎遺跡　内和遺跡」『西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書』

新東　晃一ほか　1981　「中尾田遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財調査報告書』(15)

諏訪昭千代ほか　1975　「花ノ木遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財調査報告書』(1)

立神　次郎ほか　1985　「王子遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財調査報告書』(34)

堂込　秀人ほか　1996　「一湊松山遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(19)

中村　耕治ほか　1986　「前谷遺跡」『松山町埋蔵文化財調査報告書』(1)

中村　耕治ほか　2002　「上野原遺跡　（第 10 地点）」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(28)

弥栄　久志ほか　1987　「榎木原遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財調査報告書』(44)

鹿児島県立埋蔵文化財センター
研究紀要・年報 縄文の森から 第8号

発行年月　２０１５年１０月
編集・発行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
TEL　0995-48-5811
E-mail　maibun@jomon-no-mori.jp
URL　http://www.jomon-no-mori.jp
印　　刷　有限会社　国分新生社印刷
〒899-4301　鹿児島県霧島市国分重久627-1

Bulletion of Kagoshima
Prefectural Archaeological Center

From JOMON NO MORI

研究紀要・年報　縄文の森から　第8号

二〇一五　鹿児島県立埋蔵文化財センター

No.8　CONTENTS

《Study Note》

Ironware excavated from Underground Carridor-style Brial Chambers in the Kofun jar,Kimotsuki Plain
Shinyashiki Kumiko

X-ray fluorescence analysis of Medieval pottery in Southern Kyusyu,Japan
Kuroki Rie

Ancient South Kyusyu considered from vegetable matters with focus on Tenjindan site.
Fukagawa Yuko

Validity and Problems of All Dot Excavation
Tategami Michifumi

Miyanoue site's pottery group in the first half of the end of the Jomon
Nagano Shinichi

The Ritural site to Be Affected Tumulus In Osumi Aria
Nakamura Kouji

Education for local patriotism and archeology
Yoshimoto Teruyuki

《Materials of Archaeological Research》

Introducing Chinaware from Southeast Asia excavated in Kamizuru site by the Manose river lower stream
Uwatoko Makoto

Annual of Kagoshima Prefectual Archaeological Center of the 26th year in Heisei

Kagoshima Prefectural Archaeological Center
October　2015